

特別号発刊にあたって
特別講演・シンポジウム

「今、共食を考える」に託したこと



名古屋学芸大学健康・栄養研究所
所長 足立己幸

今年2月23日に、特別講演・シンポジウム「今、共食を考える」が多くの方々に支えられて盛会に開催されたこと、そしてその内容を研究所年報第6号特別号として発刊できることに、心から感謝申し上げます。

名古屋学芸大学は社会からの大きな期待を得て生まれ、育ってきた3つの学部（ヒューマンケア学部、管理栄養学部、メディア造形学部）から成り立っています。ですから研究所は3学部の各特徴が存分に発揮され、それらが融合した研究や実践を社会に開く窓でありたい、と運営委員会等で話し合ってきました。この機運が高まっていた昨年1月に、名古屋学芸大学創立10周年記念事業への参加のチャンスをいただき、本特別講演・シンポジウムの計画が開始されました。

健康・栄養に関する国内外でホットな課題に真正面から挑戦するテーマであること、名古屋学芸大学や研究所の研究・実践の蓄積が大きい得意分野・得意な方法を活かすこと、これらが3学部の結合によってさらに質を高めることができること、そして地域社会の子どもから高齢者まで多くの人々の健康・栄養の向上に役立つこと等を重視して検討をすすめました。身丈以上の高望みであっても、このチャンスに研究所自体がより質の高い“社会に開く窓”に前進したい願いもありました。

健康・栄養の実践面に詳しい研究所研究員や客員研究員を加えた実行委員会の提案を受けて研究所運営委員会で“食育”と“共食”がキーワードに決まりました。共食は第2次食育推進基本計画の重点課題の1つであり、「健康日本21」（第2次）の食行動目標に位置づけられましたので、これからの食育や健康づくりのキーワードであり、まさに超ホットなテーマです。研究所メンバーの実績が積みあがっていることも選択の理由になりました。また、テーマへのアプ

ローチはこれまでの研究・実践の報告に留めず、これからの研究・実践の展望を考える、同時に参加者それぞれが具体的な展開のヒントを得る場にしたいと願いました。

基調講演「脳は“いっしょの行動”で育つ」は、人間が他者と行動を共有するとはどういうことか、人間らしい成長や生き方にとってどんな意味があるか等について、教育とのかかわりで脳科学研究の第一人者小泉英明博士にお願いしました。座長の本学井形昭弘学長は精神医学分野での重鎮でありますので、両巨頭の組み合わせで実現できることになり、関係者は大興奮したことを思い出します。

シンポジウム「共食で、あたたかい食育を」は、全国の食育政策を担う清野富久江博士、学校での食育実践のベテラン上原正子管理栄養士、それぞれの場で个性的な共食の提案と実践をすすめている田代晴子氏、近藤京子氏、塚原丘美氏の協力をいただけることになり、議論を重ねて、講演要旨集の準備も進みました。

一方、会場は800名収容のウイルあいちウイル大ホールに決めました。大勇断の背中を押してくださったのは当時管理栄養学部・服部健治准教授です。この決断のおかげで、周知を全国サイズで、他分野へも広げることになり、当日総合討論が活発に行われることにつながりました。名実ともにご尽力賜りました愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、公益社団法人愛知県栄養士会、愛知県食生活改善推進連絡協議会、中日新聞社と関係の皆様、感謝申し上げます。

当日は、岸本満教授の運営委員長と細江事務局長(当時)の下、3学部の教員と事務部門関係者の見事なチームワークで順調に運びました。映像記録はメディア造形学部の若手専門家が担当するなど、3学部の専門性を出し合った協働でした。講師控室には学長と3学部長が揃って来室され、小泉英明博士と研究方法論や教育論を交わされるなど、全学あげての参加・協力をいただき、心から感謝申し上げます。

当日は晴天に恵まれて、演壇も大ホールも熱気一杯の基調講演、シンポジウムと総合討論が行われました。その内容は本特集号の本文でお確かめください。

さて、会終了後、当日の内容を繰り返し学習したい、より多くの人びとと共有したいという希望が大学内外から寄せられました。単行本での出版も考えましたが、研究所運営委員会としては研究所年報特別号としての発刊になりました。名古屋学芸大学健康・栄養研究所年報はISSNに登録されている雑誌ですので、内容が魅力的であれば世界中の関係者との討論の

可能性も高くなると期待されたからです。当日、参加できなかった方々が内容も熱気も再現し共有できるようにと、当日の音声記録そのままを、パワーポイントの内容と共に再現してありますので、ぜひご活用ください。

特集号発刊にあたって、年報編集委員長北川元二管理栄養学部教授、特集号編集委員渡部眞メディア造形学部教授、岸本満管理栄養学部教授、塚原丘美管理栄養学部教授をはじめ多くの方々の多大の協力をいただきました。

2月23日から今、10か月近くたちます。この間、関連の学会や研究会での取り込み、月刊誌「栄養と料理」等マスメディアでの公表、それを読んだ人々の研修会開催等が、今も続いています。10月初めにはウインクあいち大ホールで、名古屋テレビ局担当の民間放送教育協会関連のシンポジウム「共食のススメ」が公開されました。私は基調講演をさせていただきましたが、「共食であたたかい食育を」の輪が着実に広がっている実感を得て感謝の気持ちがいっぱいでした。本特集号がより深い科学的根拠をもって、名古屋学芸大学健康・栄養研究所の“社会に開く窓”を広げていくことを期待します。

ほんとうにありがとうございました。

